

本当の「寄付と支援」って？

尚綱高等学校 2年 西村 彩葉

「貧困の原因は寄付と支援でした。」

初めは全く意味がわからなかった。「この人は何を言っているのだろう、そんなわけないじゃん。」なぜなら私は小さい頃から貧しい人や困っている人を助けることが「善」だと教えられていたし、それは当たり前だと思っていたからだ。だが後に、この言葉が私を大きく変えてくれた。

今年の夏、私は NGO の職員としてアフリカの貧困国で開発援助を行われた方とインターネット上で意見交換をする機会があった。私は初め「私たちのような豊かな国が途上国を支援し、教育を中心とするボランティアを行うこと。」と言った。それに対しその方は「私は現地で慈善事業として撒き散らされる無闇やたらな寄付や支援にものすごく苦しめられた。その場しのぎの快樂である寄付に依存し、何世代にも渡り、中毒のようになった人々を見てきた。そもそも教育という名目でアフリカの彼らに英語を喋らせ、洋服を着せ、キリスト教を教えることは、特定外来生物が日本の生態系を壊しているのと何ら変わりはないと思う。」とおっしゃった。

その瞬間ハッとした。本当の「支援」ってなんだろう。お金ではない本当の「豊かさ」ってなんだろう。彼らには彼らなりの幸せや豊かさ、文化や歴史があったのにそれを壊していたのは私たちの支援だったのかもしれないと感じた。例えば私がしたことのある、いらなくなった服を発展途上国に届けるというボランティア。今考えてみれば「私にとってはいらなくなった服だけど、しっかりとした着る服がないんだから喜ぶだろう。」という気持ち根底にはあった。それは相手を卑下して私が出したことは単なる自己満足だったのかもしれないと思いはじめた。それに自分たちの中で社会を組み立て、狩猟などで暮らしている部族は貧困でもなければ、不幸せでもない。私たちの視点で「これが幸せだから。」と提供することが彼らにとっての幸せだとも限らない。

このことから学べたことは「魚を与え続けるのではなく、魚の釣り方を教えること」。つまりは本質的な支援が大切だということだ。そして今の私が考える支援とは彼らのための教育とそれを生かせる安定した雇用が整っている環境を共に作っていくこと。教育を何世代先の未来にまで繋げていくこと。彼らの言葉で、彼らの伝統に従って、彼らにとって必要な教育を提供するのだ。現地土着の文化や伝統をただの「昔のこと」で終わらせず、ずっと先の未来にまで継承させ、持続可能な安定した暮らしを根付かせるような教育を実行したい。そうすることが出来ればきっと彼らなりの幸せと発展が実現されることだろう。

こう書くとすごく大きなことに見えてくるが、私は一人ひとりが「地球市民」としてこの現状を知り、少しでも考えることがきっと私たちのできる事なんだろうと思う。一人の広げる手は小さくても、皆でつなげばやがて大きな輪となり大きなものを動かせる。当たり前かもしれないが一人の「意見」が変われば「世論」が変わる、世論が変われば「国」が変わる、国が変われば「世界」が変わる。

私は支援や寄付を批判したいのではなく、それは本当に相手のためになっているのかということを知りたい。完璧な善はないがきっとそれに近づけることならできる。

私も、貴方も、貧困で苦しんでいる子も、同じように成長していく。私ももう少し成長すれば別角度から、もっと広く長い目で世界を見ることが出来るようになるだろう。これからもあげることではない、彼らにとって本当に必要な支援を考え続け、自分なりの結論を出したい。世界の明日を変えるのは私かもしれない。